

# インクとしてバートルビー

## — “Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall-Street” における記号の物質性について

菅原大一太

### 1. はじめに

ハーマン・メルヴィルの “Bartleby, the Scrivener” では、ニューヨークのウォールストリートにある法律事務所で起こる出来事が描かれている。法律事務所の経営者である語り手 “I” は、仕事量の増加の都合で、事務員を補充しようとして、バートルビーという人物を雇う。しかしながら、人員の補充によって仕事量が分散されるどころか、バートルビーは仕事を次第に引き受けなくなっていく。被雇用者たる事務所の所員としては、非常に不可解なこのバートルビーという人物の行動と、その末期を、物語はレトロスペクティブに語っていく。

バートルビーという人物の不可解さのよりどころは、頼まれた仕事を “I would prefer not to.” と言って、取り組むのを拒否することである。労働力を提供するものとして事務所に入所している以上、そこで仕事を引き受けてこなすのは不自然なことではないし、その点において、われわれ読者は、彼に対する反応をこの作品に登場するバートルビー以外の人物と共有することができる。しかし、彼と語り手を含めたほかの所員のやり取りをよく検討してみると、やりとり自体が成立していないのに気づく。彼以外の所員からの質問に対してバートルビーは、“I would prefer not to.” と一様に答えるのだが、返答を受けた方は「したくない」という返事を、「しない」という意思表示ととらえてしまっている。しかし、バートルビーの方にしてみれば、“I would prefer not to.” という返事によって、“prefer” という「好み」あらゆる意思表示をしているだけであって、彼が仕事をしないどころか、質問の返事をする意思をも持っていない可能

性も考慮することが出来るであろう。

ノーマン・スプリンガーはバートルビーがなす「好み」の意思表示について次のように指摘している。

Bartleby's preference for less and less undercuts everything the narrator is and believes. Bartleby acts on what is, not what ought to be. In “I would prefer not to” … we get the framework outside the realm of assumptions, for Bartleby's *no* is directly opposed to all hope, all illusion, possibility of change and betterment<sup>1</sup>.

たしかにここでスプリンガーは、バートルビーが“preference”に応じて行動する存在であると指摘している。しかし同時に、「仮説の領域の外側の枠組み」ということを考えたとき、それはスプリンガーが指摘するような「希望、幻想、変化や改良の可能性」のみならず、他の可能性が生じることもあるのではなかろうか。スプリンガーの言う“assumption”という、論理の積み立ては、その合理性ゆえに、それ以外の要素を淘汰してるし、また、人間社会の進歩の歴史を考慮すれば、そこにはさらなる多様性が存在しているはずである。バートルビーの“I would prefer not to.”という答えは、本当に「義務にとらわれず」、人間社会の合理的な慣習を破壊してしまっているのだろうか。バートルビーによって繰り返し述べられる、“I would prefer not to.”という言葉は、われわれ読者に強く印象づけるが、テキストの冒頭部で述べられる以下の部分もまた注目に値する。

I am a rather elderly man. The nature of my avocations for the last thirty years has brought me into more than ordinary contact with what would seem an interesting and somewhat singular set of men, of whom as yet nothing that I know of has ever been written.<sup>2</sup> (傍線筆者)

語り手は、職業上、これまで数奇な人々に多く出会ってきたが、それについてはこれまで「書かれてこなかった」とここで述べている。実際に当人に会ったり、伝え聞いたりすることは当然あったのであろうが、文字表現としては記されることはなかったというのである。つまり、「書く」という行為の対象となる「文字」が、ここでメルヴィルによってテキストの前面に押し出されているのである。本稿では、“Bartleby, the Scrivener”におけるバートルビーの死とシニフィアンの物質性、また、記号の恣意性に着目し、本テキストと記号としての「文字」の関係について考察したい。

## 2. “prefer” と “assumption” の共通性

この物語で興味深いのは、仕事をしないバートルビーを、その雇用主である語り手は解雇できないことである。労働とその対価の相互関係により成り立つ「雇用契約」は、この物語では厳格には適用されていないのだ。

Had there been the least uneasiness, anger, impatience, or impertinence in his manner; in other words, had there been any thing ordinarily human about him, doubtless I should have violently dismissed him from the premises. (21)

語り手がバートルビーに仕事を頼もうとしても、拒否されてしまうのを受けての発言である。語り手はここで、バートルビーの態度に驚き、憤慨しつつも、その不可解さと時間のなさを理由に、解雇を思いとどまったと言っている。この部分をはじめとして、結局物語では、語り手の方からバートルビーの首を切り、強制的に事務所から彼を退去させるということはなされない。それどころか、事務所に居座って生活さえし始めるバートルビーを残して、逆に事務所の方が移転してしまうという、まるで所有権の保持者が入れ替わったかのような事態が起こってしまう。このことについて前述のノーマン・スプリンガーは、次のように述べる。

He[the narrator] is fully aware of the improbability of his own actions in the face of Bartleby's behavior and he sets about in his methodical way to solve the problem, though the very methodical quality of the man is also immensely useful as a means of heightening the effect of his lapses … (Springer 410)

ここでスプリングアのいう “methodical way”、つまり「秩序だったやり方」というのは、バートルビーがあまりに不可解であるために、語り手が本当は理解できていないことに対して、表面上もっともらしく、そして合理的な理由をバートルビーに付与することを意味している。つまり、語り手は意味のわからないものに対し、自分のふるまいに理屈をあたえることで、その不合理さから生じる不安を解消しようとしているのである。そして、語り手がとったその行為が間違いのものであるという指摘も、もっともなものだと考えられる。というのも、結局はこの語り手の事務所は移転するはめに陥ってしまい、移転した後も語り手は、バートルビーの問題で世間から呼び出しを受けることになるからである。つまり、assumptionを立てる語り手は、読者と視点を共有しうる合理性を体現する人物ではあるが、その合理性ゆえに、仕事を拒否するバートルビーを解雇しないという不合理な行動をとってしまうことになるのだ。そして、バートルビーと語り手は、ともに不合理さを体現してしまうという点において、「共通」な存在となっているのである。

“do no more writing?” [sic]

“No more.”

“And what is the reason?”

“Do you not see the reason for yourself,” he indifferently replied. (32)

なぜ仕事をしないのかという語り手からの質問に対して、バートルビーは、「その理由は自分でお分かりでしょう」と答える。ここでバートルビーは、同じ不合理性を所有する同胞として語り手をとらえ、不合理がゆえに、

その不合理さをもって考えよと語り手に要求していると考えられるのである。こうして、逆説的な形でこの2人は不合理さを共有してしまうことになるのである。

### 3. 恣意的な記号の世界

本テキストにおける“prefer”と“assumption”が不合理さの点で、共通点が見られるものの、やはりバトルビーと彼を取り巻く世界の間には断絶が見られる。次の部分では、語り手が「安全な」人物であると評されるのは、この人物が社会で一般常識と考えられているものを兼ね備えているからだということが述べられる。

I am one of those unambitious lawyers who never addresses a jury, or in any way draws down public applause; but in the cool tranquility of a snug retreat, do a snug business among rich men's bonds and mortgages and title-deeds. All who know me, consider me an eminently *safe* man. (14)

ここで“safe”という語がイタリック体で記されているのはなぜか。確かに、物語の展開上は、法分野での仕事で野心を持つこともなく、安定した仕事を持っているという意味で“safe”な存在とされているのは理解に難くない。しかしながら、文字そのものにこのテキストが焦点を当てていると考えるとき、この表現は独特の意味合いを持つ。つまり、記号の意味が稼働するメカニズムについて考えると、この“safe”は、記号のシニフィアンとシニフィエが一对一の対応関係を持ち、「安定している」という意味を持つと考えられるのだ。そしてまた、このことは、語り手が業務上取り扱うものが、“bonds (債権)”や“mortgages (抵当証券)”、そして“title-deeds (不動産証券)”である点にも重なる。これらはすべて、実際上の事物を代理した「文書」であり、所属物・所有物を文字や数字で置き換え、言語記号で可視化したものである。それらはすべて置き換えられたものの証明であり、それは言い換えれば、事物と記号が一对一

で寸分なく対応したもので、言語記号が意味のあるものとして言語の使い手に理解される、いわば「言語の世界」の意味体系と重なってくるのだ。

そして、その“safe”であるという、語り手のこの資質は、次の部分のように、語り手がバートルビーに出した質問の妥当性を介して、第三者によって承認される。こうして語り手は社会一般の価値基準を体現した人物だととらえられ、バートルビーの存在との差異化がなされることになる。

“Turkey”, said I, “what do you think of this? Am I not right?”

“With submission, sir,” said Turkey, with his blandest tone, “I think you are.” (22、傍線筆者)

さらにいえば、ここで語り手が尋ねる、“right”という語もまた、業務上の妥当性に対して同意を求めたものだが、ここでいう「正しさ」の意味合いを考えたとき、それは一つの記号が一つの意味をもち合わせて、それが稼働する世界がここでは存在していることを示しているのだ。そして同時に、この質問の対象がバートルビーであることをあわせて考えれば、ここで語り手をはじめとする事務所の所員とバートルビーとがはっきりと差異化されていることがわかってくる。

しかしながら、当の事務所の所員もまた、一風変わった人物のように描かれている。それらの人物の意味合いはどのように捉えられるであろうか。事務所員である二人の人物、ターキーとニッパーズは、仕事を行う上でのその作法が特異であると語り手によって述べられている。

Turkey was a short, pousy Englishman of about my own age, that is, somewhere not far from sixty. In the morning, one might say, his face was of a fine florid hue, but after twelve o'clock, meridian-his dinner hour-it blazed like a grate full of Christmas coals; and continued blazing-but, as it were, with a gradual wane-till 6 o'clock, p.m. or thereabouts, after which I saw no more of

the proprietor of the face, which gaining its meridian with the sun, seemed to set with it, to rise, culminate, and decline the following day with the like regularity and undiminished glory. (15)

また、ターキーは午前中の働きぶりとは打って変わって、午後は様子が変わり、熱のこもった様子で働き始める。しかしながら、その熱は仕事に悪影響を及ぼしている。

The difficulty was, he was apt to be altogether too energetic. There was a strange, inflamed, flurried, flighty recklessness of activity about him. He would be incautious in dipping his pen into inkstand. All blots upon my documents, were dropped there after twelve o'clock, meridian. (15、傍線筆者)

ターキーの熱は粗雑なものとして描かれており、書類にインクを垂らしてしまうという有様であった。ここで興味深いのは、その粗雑さが、「インクのみみ」として描かれているという点である。音声記号であればミスにもならない事柄が、ここではミスの内容として、インクの不適切な滴りが提示されている。つまりこのような事務所員のふるまいの描きだすメルヴィルは、記号の意味内容、つまりシニフィエというよりもむしろ、文字そのものへの関心、つまりシニフィアンへの注視をわれわれ読者に喚起しているのである。さらに、もう一人の事務所員であるニッパーズは、ターキーと対をなす、対照的な人物として描かれている。

It was fortunate for me that, owing to its peculiar cause-indigestion-irritability and consequent nervousness of Nippers, were mainly observable in the morning, while in the afternoon he was comparatively mild. So that Turkey's paroxysms only coming on about twelve o'clock, I never had to do with their eccentricities at one time. Their fits relieved each other like guards. When Nippers' was on, Turkey's was off; and *vice versa*. This was a

good natural arrangement under the circumstances. (18、傍線筆者)

ニッパーズの方は、ターキーとは逆に、午前中に“fits”を起こし、ちょうどネジとネジ穴がかみ合うように、その“eccentricities”が対をなしている。事務所の経営者である語り手からすれば、このことを“a good natural arrangement”と捉えるのは、当然である。しかしながら、テキスト全体を、文字記号の意味の稼働のメカニズムの寓話と捉えるのであれば、“safe”な記号を体現する語り手に対して、奇抜で、“safe”な世界から逸脱するこの所員の様子は、記号の意味体系の特質である恣意性(“arbitrariness”)を表していると考えられるであろう。記号が意味のあるものとして機能するのは、それを稼働させる法が必要である。ターキーとニッパーズには、二人なりの原因や理由があって、いわば癲癪を起こすのであろうし、その激しさは語り手が自ら述べる“safe”な様子とは異なる。つまり、そこにはそれぞれの、記号を稼働させる判断枠組があるのだ。テキストで描かれるこの法律事務所はすなわち、記号を意味のあるものにする人間社会一般の縮図であり、言語空間の小宇宙が読者に提示されているのである。

#### 4. 文字としてのバートルビー

もし、この法律事務所が言語体系の「世界地図」を表しているのなら、事務所員であるバートルビーの位置づけはどのようなものになるのだろうか。その特異な仕事ぶりのため、事務所員はバートルビーにみな振り回されるのだが、同時にバートルビーはプロットの展開を牽引する役割を持っている。そして、彼が事務所から追い出され、語り手の小宇宙から出て行くのと軌を逸にして、今度は語り手の方がプロットを進めて行く。その中で、バートルビーの「言語的な」意味合いを考えたとき、興味深い場面に遭遇する。バートルビーが刑務所に収監され、語り手が様子を見に来訪した時の場面である。

Strangely huddled at the base of the wall, his knees drawn up, and lying on his side, his head touching the cold stones, I saw the wasted Bartleby. But nothing stirred. I paused; then went close up to him; stooped over, and saw that his dim eyes were open; otherwise he seemed profoundly sleeping. Something prompted me to touch him. (44-45)

刑務所に入れられたバートルビーの様子が気になり、ストーリー上、最後に面会に来た語り手は、バートルビーの様子がおかしいことに気付く。バートルビーは全く身動きをせず横になり、膝を抱えるようにして、目を開けたまま横向きに寝そべっているのだ。テキストではこの描写以上に、その様子が語られないので、それが死を表すのかは判然としない。しかし、バートルビーが死を迎えているかどうかという点以上に、言語的存在としてのバートルビーの位置づけを考えた場合、興味深いのは、バートルビーの取っている、その姿勢である。テキストでは、言語活動として、“I would prefer not to.”ばかり述べる、静的な存在であったのが、ここでは身体の様子が細かく語られている。バートルビーのその曲線的で、身動きしないその様子は、記号の観点から考えたとき、これは文字そのもの、つまりシニフィアン<sup>1</sup>の形状的な様子を示していると考えられる。シニフィアンはあくまで記号であって、シニフィエと表裏一体となることが前提とされる。このとき、それが意味のあるものとして働くかどうか、機能として重要なのであって、記号そのものの形状には制限がない。バートルビーのこのときの様子は、文字記号そのものであり、いわばシニフィアンと結びつくの待つか、インクの染みそのものなのだ。そのように考えると、この場面と結びつくのが、法律事務所で働き始める前のバートルビーの仕事についての、語り手の言及である。

Dead letters! does it not sound like dead men? Conceive a man by nature and misfortune prone to a pallid hopelessness, can any business seem more fitted to heighten it than that of continually handling these dead letters, and assorting them for the flames? (45)

バートルビーは事務所に来る前、“Dead letters (宛先不明の手紙)”の廃棄をする仕事に就いていたというのだ。言語は、その本来の働きとして意味を持つものであるが、それはあくまで、言語の担い手である人間が「読む」という行為を行わない限り、意味を成さないものである。読まれない文字はただ単なる、物質的なインクの染みとして存在するにすぎない。事切れたかのように身動きしないバートルビーの様子は、読まれない文字そのものと一体化しているのである。さらに、このことはテキストの冒頭で語り手が紹介するバートルビーの様子とも連動する。

Bartleby was one of those beings of whom nothing is ascertainable, except from the original sources, and in his case those are very small. (13、傍線筆者)

バートルビーは「何物にも帰すものがなく」、「原典によらなければそうすることは不可能だ」というのだ。これを言語の意味機能のメカニズムに照らし合わせたとき、シニフィアンは宙に浮き、原典、すなわちシニフィエがない状態となっていると語られるのである。唯一「原典」と呼ぶべき、「宛先不明の手紙の処理者」という点が、テキストの最後になってようやく語られるが、テキストの終わりより先のストーリーは求め得ない以上、それはまるで文字を書く際の、書き手の「癖」のような痕跡となる。シニフィアンとシニフィエの切り離しが文字の物質性という形でエンディングを迎えているのである。

## 5. 結論

バートルビーを文字そのものと捉え、テキスト全体を言語的意味体系の構築される世界の寓話と捉えるならば、本テキストとわれわれ読者との関係性、すなわちこのテキスト自体の、読者に対する意味機能はどのようなものと考えられるであろうか。インクの染みを意味のあるものとして人間が認識するその様子は、本を手にとって読者がテキストを読み進めてはじめて、テキストとして稼働し始める。このときの読者は文字を希求する欲

望をもって、テキスト空間を構築するが、インクを「文字」にし、意味を求める様は、とりわけアメリカというコンテキストを考えたとき、その歴史的なコンテキストを想起させる。

新大陸に新たな居住空間を開拓したイギリスの植民地は、本国から大西洋を隔て、大きく離れた陸地にある荒野であった。1776年の独立宣言は、「自由・平等・幸福の追求」を高らかに読み上げ、今もなお国是とも言い得る記号である。この独立宣言が時を経てもなお力を持ち続けるのは、国家発祥の起源として、植民地が本国の社会空間との相違を持つが故に、現地人同士の文化的背景を共有する手段として、言語を求め、そしてそれを発信することが強く求められていたからであろう。

もしそう考えられるならば、独立宣言以前の、本国からの独立の萌芽期に成された一連の反税制の抗議活動における、「印紙税法」への抗議が興味深いものとなる。1765年に本国イギリスより出されたこの税法は、翌年の1766年早々に、植民地議会の反対宣言を受けて撤廃された。船舶の規制や茶などの物品ではなく、印刷された紙面そのものに課税されたことに強く異議を唱えたのである。課税という行為は、主に課する側への金銭面での収入を意図するものであり、課税側とすれば本国と同等の施策にすぎないのであるが、植民地側とすれば、それは、「印紙使用の確認に本国政府任命の印紙販売官が市民の日常生活にまで入り込み、政府権力が臣民の財産を脅かす危険を感じ取ったのである」<sup>3</sup>。

印刷物という、言語表現を乗せる媒体は、そこに読み手の自己を拡大させる要素を内包する。書き手と読み手の間で記号の意味作用が稼働し、そこで生まれる共有の意識ほど、人間の同胞意識を高めるものはない。なぜなら、言語の「意味」が稼働するとき、読み・読まれる行為を通じて、記号を意味のあるものにする法が共有されるので、自分を承認してもらいたいという欲求が満たされるからである。そして、承認された自己が増殖し、現地人が一つの共同体にいることを自覚したとき、そこに生まれた記号こそ、“America”というインクの染みなのであった。読み手が手に取らなければ意味を成さない文書は、それほどまでに人の欲望をかなえるものとして機能していたのである。

文字記号を欲求する歴史的コンテキストにおいて、言語が稼働するメカ

ニズムを提示する本テキストは読者の言語への欲望を喚起する機能を持つ。さらには、プロットを牽引する文字そのものを体現する、インクとしてのバートルビーは、読者に読まれることをじっと待ち続け、そしてまた、シニフィエと一体化させてもらいたいと、読者を誘惑するのだ。そして同時に、読者として文字を希求する営みそのものの中に、アメリカの独自性を見出し得るのである。

## 註

<sup>1</sup> Norman Springer. “Bartleby and the Terror of Limitation” *PMLA* 80(1956): 415. Print.

<sup>2</sup> Herman Melville. “Bartleby, the Scrivener” *The Piazza Tales*. 1856. Evanston: Northwestern UP, 1998. 13. Print.以下、本書からの引用はカッコ内にページ数のみ記す。

<sup>3</sup> 野村達朗編著 『アメリカ合衆国の歴史』 京都：ミネルヴァ書房 1998年、32ページ

## 引用・参考文献

Culler, Jonathan. *On Deconstruction: Theory and Criticism after Structuralism*. Ithaca: Cornell UP, 1982. Print.

Gilmore, Michael T. *American Romanticism and the Marketplace*. Chicago: U of Chicago P, 1985. Print.

Melville, Herman. “Bartleby, the Scrivener” *The Piazza Tales*. 1856. Evanston: Northwestern UP, 1998. Print.

Rowe, John Carlos. *Through the Custom-House: Nineteenth-Century American Fiction and Modern Theory*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1982. Print.

Springer, Norman. “Bartleby and the Terror of Limitation” *PMLA* 80(1956): 410-18. Print.

野村達朗編著 『アメリカ合衆国の歴史』 京都：ミネルヴァ書房 1998.